

目次

- 1) 「仏教ユーモア」: Page 1
- 2) 「嫌な人や嫌な状況に出会う（怨憎会苦）」にどう向き合うべきか？
ー 夫婦関係に焦点を当てる ー Page 2
- 3) 海外仏教ニュース・できごと： かの『ニューヨーク・タイムス新聞』
が親鸞思想を取り上げる。 Page 4
- 4) 「ケネス田中スケジュール 公開講演・講座など」（1月～3月） Page 5
- 5) 資料編：『ニューヨーク・タイムス新聞』の翻訳 と 原文 Page 6

1) 「仏教ユーモア」

熊木さんというが知人が伝えてくれたシャレに、「〇〇が濁ると〇〇になります」という面白いものがある。例えば、「徳（とく）」が濁ると、「毒（どく）」になる。で、私はこれを濁るのではなく、次のようにアレンジした。

「徳（とく）」が「自慢」になると、「毒（どく）」となる！

「口（くち）」はブツブツ（仏仏）言うと、「愚痴（ぐち）」となる！

「墓（はか）」にはお参りしないと祟りがつくと恐れて、お墓参りするような人は「馬鹿（ばか）」ではないでしょうか！（ちょっとキツイでしょうか？）

いかがでしょうか？ユーモアは、我々の「こだわる心」（分別心・執着心）をちょっとでも柔らげてくれると思います。

* 注：ところで、仏教では良くない言葉である「分別」や「執着」も、世間では良い言葉となっている！例えば「あの方は分別がある」、そして「本庶佑先生の執着心がノーベル医学・生理学賞に繋がった」。文化言語学の観点から興味深いですが、仏教としては困ったことですね。

2) 「嫌な人や嫌な状況に出会う苦（怨憎会苦）」にどう向き合うべきか？

ー 夫婦関係に焦点を当てる ー

- a) 「怨憎会苦」（おんぞうえく）とは、仏教の「四苦八苦」という教えの一つです。
- b) 「怨憎会苦」には、人間関係から生じる苦が中心となるようです。現代人の最も多い悩みの元は、人間関係のようです。しかし、心理学者アドラーによると人の幸せは主に人間関係から得られるものですので、人間関係が良くいかないと、人は不幸になるそうです。
- c) その人間関係の中でも、今回は、「夫婦関係」に焦点を当てたいと思います。もちろん、「夫婦関係」自体は、嫌なものではありません。しかし、最近、思ったより多くの方が「夫婦関係」にかなり悩んでおられることに気づきました。そういう意味で、夫婦間に悩むことは、「嫌な関係」となります。（因みに、この中には、未婚者の関係も含んでも良いと考えます。）
- d) 夫婦の間には色々とありますが、幸せな関係に少しでも近づきたいのであれば、改善の努力が必須です。私は、家内と結婚して43年になります。家内は素晴らしい女性で良き母でもあります。外からは仲の良いカップルと言われますし、私もそう思っていますが、我々でも改善の余地はあります。不和の両親を持った私には、いくらかの言動の問題があります。それを改善するように努力してきましたが、常に改善の余地は残っているのです。
- e) その際、私自身のガイドの一つとなるのは、「L.E.A.F.」という教えです。私はアメリカにいた時、住職として15組ほどのカップルの結婚式の司婚者を務めました。その時の法話の内容は、良い結婚関係を実現するための四つの教章が中心となりました。その四つとは、L.E.A.F.（葉っぱ）です。
- L. = Little things 小さいこと
 - E. = Effort 努力
 - A. = Awareness 気づき
 - F. = Friends ともだちであること
- f) L. = Little things 「小さいこと」を重視し楽しむことを大切にする。人生には、家族の卒業式や住宅の購入や海外旅行のような大きな出来事を重視し夫婦の思い出にする傾向があります。しかし、「小さいこと」となる日常の出来事はもっと頻繁に起こるので、これらを大切にし、エンジョイすることが幸せに繋がると思います。例えば、夕食の後一緒に片付け、皿を洗い、一緒に散歩することはどうでしょうか？そしてその「小さいこと」の行う際、「ベチャ、ベチャ」喋れることには、充実感や満足感が深まると思います。
- 仏教では、目の前にある「今」を大切にする生き方が進められるということは、人生の大半を構成する日常の小さいことを味わい、楽しみ、そして学ぶチャンスとすることが大切にされるべきだと思います。
- g) E. = Effort 「努力」は必要です。Love alone is not enough. 「愛のみでは足りない」のが事実です。実は、私が尊敬し理想なカップルと思うオバマ前大統領夫婦でさえ、色々と問題があったと最近出版されたミシェル夫人の自伝で明らかになりました。それを聞いて、驚き、また、いくら愛していても夫婦間をよくする努力が必要であると言うことを改めて感じまし

た。

悟り・目覚めを目的とする仏教こそ、修行・行という努力が求められます。「易行」（やさしい道）とされる浄土系の仏教においても、お念仏を称えたり聴聞したりする努力が必要なのです。

- h) **A. = Awareness** 「気づき」とは、欠点に気づくことです。欠点と言ったら、自分の欠点ではなく、相手の欠点を直ぐに思いがちですが、ここでは、先ず「自分」の欠点・弱点に気づくことです。もちろん、相手にも問題があるでしょう。英語では、「タンゴを踊るには、二人が必要 **It takes two to tango!**」という諺があるように、中々問題の原因が一人だけの欠点にあるのではないと思います。原因は二人に同じようにある場合がほとんどでしょう。しかし、先ずは、自分に目を向けないと改善は始まりません。

仏教的では、「仏教を学ぶということは、己を学ぶ」（道元）という有名な言葉が示すように、自己反省が必要となります。自分の言動を反省することは容易ではありません。何故ならば、自分の欠点を見つけるには難しい面もあり、また、見つけてもそれを認め向き合うことが容易ではないからです。しかし、自分の弱点に気づくことは、改善には必須となります。仏教は、先ずは一人称の立場で改善をはかることが求められます。

- i) **F. = Friends** 「ともだちであること」とは、男尊女卑や年上年下という関係ではなく、親友のように平等な立場で向き合うということではないでしょうか。特に、親友のように物事を話し合うことが重要となると思います。お互いの悩み、夢、感動、心配などを気楽に話せる相手になるということです。

仏教は、西洋文明の平等観（equality）より、二千年ほど前から「平等」ということを主張してきました。仏教では、平等にお互いを評価し向き合うことが心の平穏をもたらしてきたので、夫婦間でも同じように平等な友達のような関係であることが良い関係をもたらすのではないのでしょうか。

- j) 以上の **L.E.A.F.**の法話をした後、私は、菩提樹の葉っぱ（**LEAF**）を保存した押し花のようなものをきれいな鄂に入れて新郎新婦にプレゼントしてきました。それを自宅のどこかに飾り、いつも見て思い出して実践することを勧めてきました。
- k) 菩提樹の葉っぱの「菩提」とは「悟り」のことですので、それを象徴する **L.E.A.F.**をガイドとして実践すれば、夫婦間が、不和や不幸なものにならないと思います。
- l) 人生は実に凸凹道です！どのカップルにも問題があります。ですので、仏教精神を活かせば「夫婦」という人生において最も大切な人間関係が、素晴らしものに向かっていくと確信しています。

3) 海外仏教ニュース・できごと：

かの『ニューヨーク・タイムズ新聞』が親鸞思想を取り上げる。

記事の要約

（全文は、下記の資料編をご覧ください。）

1. 2017年12月4日付けの「ニューヨーク・タイムス新聞」(New York Times)に親鸞の思想が取り上げられた。執筆者は、John Kaag (マサチューセツ大学) Clancy Martin (ミズーリ大学)の哲学を専門とする大学教授である。両者とも、私の知っている限り、真宗とは関係とは関係なかったお二人である。
2. このように親鸞の考えが「ニューヨーク・タイムス新聞」で採用されたことは、驚きであり、また、画期的なことであると感じざるを得ない。
3. 記事の要旨はこうである。アメリカ人でチベット仏教徒でもあるヘレンという女性が、温暖化・環境の改善や低賃金の労働条件の廃止などに努めているが、自分自身もそれに加担している偽善者・共謀者であるということに悩む。
4. そこで、執筆者の二人は、このヘレンや多くの人々が感じている心の葛藤の解決を、親鸞聖人の人生観・世界観に示唆を求める。強調するのは、「末法」や「凡夫性」や「非僧非俗」などであり、それらを通して、先ず先進国の我々がこれら問題の「共謀者」であるという認識を取るべきだと主張する。しかし、かと言って、悲観的になるのものではなく、「勇気あふれる現実主義の声なのだ」と見る。
5. この点を執筆者の言葉を引用しよう。

親鸞のことばだ。「外に賢善精進の相を現ずることを得ざれ、内に虚仮を懐ければなり。貪瞋・邪偽・奸詐百端して悪性侵めがたし」 多くの宗教家(ついでに言えば、怒りに満ちた独善的な道德家や政治家)には耳の痛いことばではあるまいか。このことばはつまり、うまい逃げ道などないと言っているのだ。親鸞に言わせれば「地獄は一定すみかぞかし」だそうだ。しかも、この独白は絶望の淵で発せられたものでも、ある種の静寂主義を表すものでもない。むしろ、ありのままの人間の姿を介して道德と宗教的探究の実情を直視した、勇気あふれる現実主義の声なのだ。(下線ケネス による) 杉本昌子訳(本願寺国際センター)

6. このような自己認識こそ、我々がものごとをより正しく直視し、より謙虚になり、より勇気をもって種々な問題に立ち向うようになると結論づける。

4)「ケネス田中 公開講演・講座スケジュール」(1月～3月)

公開講演

- 1月16日(水) 19:00～20:30 「余裕を持ちましょう - 幸せになれる生き方」
東京 Ginza Salon KOKORO アカデミー

https://tsukijihongwanji-lounge.jp/top/ginzasalon_kokoroacademy.html

- 2月8日(金) 7:20~8:30 「嫌な人や嫌な状況にどう対応すれば良いか？」
大阪 難波別院 暁天講座
http://minamimido.jp/?page_id=13
- 2月20日(水) 19:00~20:30 「誰か・何かのためになろう — 幸せになれる生き方(10)」
東京 Ginza Salon KOKORO アカデミー
https://tsukijihongwanji-lounge.jp/top/ginzasalon_kokoroacademy.html
- 2月27日(水) 13:30~15:00 「人生は凸凹道(でこぼこみち)? 私がキリスト教から仏教へ移った理由」
東京 武蔵野大学学習講座
<http://lifelongstudy.musashino-u.ac.jp/site/course/detail/3440/>

4月から始まる公開講座のご案内

- 「ケネス・タナカの仏教教室 III — ユーモアで学ぶ仏教」
浅草 巖念寺。 月1回、8回(4月~12月) 毎回無料懇親会有り
<https://www.gonnenji.com/single-post/2018/11/01/> 『ケネス・タナカの
仏教教室III』のご案内
- 「初歩英語で学ぶ仏教講座3級」「English Buddhist Guide」の資格取得可能
東京三田 仏教伝道協会 月1回、9回~11回(4月~2月)
<http://www.bdk.or.jp/event/organization03.html>
(但し、まだ4月からの情報は掲載されていません。
前回は参考としてください。)

資料編

『ニューヨークタイムズ新聞』記事の日本語訳全文
及び

New York Times 原文記事全文

New York Times International Edition Friday, December 8, 2017 OPINION p. 14
 ニューヨークタイムズ国際版 2017年12月8日(金)掲載

暗黒の時代に活躍するのは「不浄の者」

ジョン・カーク／クランシー・マーティン

杉本昌子訳(本願寺国際センター)

チベット仏教に傾倒しているヘレンという中年女性がいる。アメリカ中西部在住で、この世界の苦しみを少しでも減らすことに力を尽くす、と最近誓いをたてたばかりだ。というわけで、彼女は思い立つ。慈悲の実践に先だって、稀有で貴重な教えを授けてもらうために、ブータンの山奥にある「虎の巣」という異名を持つタクツァン僧院に詣でよう、と。伝説によると、8世紀頃、密教開祖グル・リンポチェは雌トラの背に乗って空を駆け、その地に降り立ったという。でも、ヘレンの場合は、ミズーリ州カンザスシティから737便に搭乗しなければならない。

その飛行機が消費する燃料は自然環境の破壊に一役買っている。ヘレンが口にする機内食は低賃金被雇用者らによって用意され、もうけはすべて彼らを搾取している大農場経営者のふところに入る。ヘレンが身に着けている服も搭乗する飛行機の座席も、低賃金で長時間労働を強いる搾取工場の製品だ。そもそも航空会社自体が巨大な多国籍複合企業ではないか。

おわかりかな。もっとも気高い動機に基づく崇高な旅ですら、もっとも避けたい破壊行動への加担にならざるをえないのだ。アメリカ人超絶主義者、ラルフ・ワルド・エマーソンの弁を借りれば「どこに行こうと巨人はついてくる」というわけだ。いかに善意に根ざすものであっても、ヘレンの行動はせいぜい偽善と自滅行為の中ほどに位置すると言わざるをえない。

だが、ヘレンを非難するのはまだ早い。そもそも、我々は複雑に絡まり合った共謀の時代を生きているのだ。それも、政治的な共謀関係だけではない。現代社会が抱える火急の問題、貧困、飢餓、環境破壊や温暖化などはすべて地球規模のそれだ。大なり小なり、また悪気はなくても、我々は結局のところ、こうした問題を悪化させることに加担しているのだ。

そう考えれば、ヘレンのやらかしたことも彼女一人の責任ではない。彼女が陥った上述の環境を彼女が生み出したわけではないのだから。仏教的探究心に裏づけられた彼女のブータンへの旅を、上記以外の方法で実現することは非現実的どころか、ほぼ不可能と言っていい。だが、真の仏教徒であるなら、現実に現代社会が抱えるこのような共謀関係に対峙する姿勢は必要だろう。

これは西洋の倫理学者が言うところの「汚れた手の問題」、つまりきれいなままの手では世界の暴虐さを正すことはできず、むしろより汚れた状態の陥らねばならない、という論理と似ている。「外部から組織体系を正すことはできない……」とは要するに、こうした共謀関係の解消役を託される相手がしばしば、C.S.ルイスが「内なる環」とさげすんだ、多少の道徳的な不適切さに目をつぶることのできる者たちであることと、同じ構造にある。

では、今日、多くの者、特にアメリカ人である我々はこのような状況をどう理解すべきか。多少なりとも自らも責任があり、その実、本当は逃げ出したい、せめて減らすか、いくらかでも矯正したいと思う諸悪に対して、人は何をなすべきか？ 善をなしたいのに、むしろ害をなしてしまうような世界にいるとしたら？ そんな壊れた世界で道徳的にふるまい、信念を貫くことは可能なのか？

こうした疑問は、何も今初めて生じたものではない。それは、仏教徒にとっても別段、目新しいものではないだろう。なかでも、これらの問題に真正面から向き合ったのが、13世紀の日本の僧侶、浄土真宗の開祖親鸞だ。親鸞は自らが、仏教で言うところの末法の時代に生きていたと考えていた。状況は今の我々とはやや異なる。仏教界の伝統的な体制が崩壊の危機にあった時代だ。親鸞は、こうした社会も宗教界も腐りきった「汚れた」時代に対応する方法として、阿弥陀仏に心から身を任せて浄土への道を歩むことを提案した。

身を任せる対象は清らかであっても、親鸞曰く、浄土に至る道は清らかとはほど遠い。そして、それは現在もそうである。親鸞に言わせれば、我々は[悪に]手を染めつつ、それを正すよう努める責任を担っているのだ。墮落した時代になんとも適した教えではないか。浄土教は人々に道徳的生活を放棄するよう説いているわけではなく、ありがちな[道徳的である]ふりをすることをやめよ、と説いているのだ。そこで求められているのは、欠点だらけの人間同士、かろうじて個人的にも社会的にも生きていける程度の、ごく控えめな道徳心である。

浄土真宗は、避けがたく、どこまでもついてまわる [悪との] 共謀という問題に、真正面からじかに対応している。道元や法然といった（実際、非常に関係の深い二人であるが）より伝統的な僧侶らとちがい、親鸞は修道生活にいそしむことができないという思いから、そもそも当初から、そして最後まで逃れることができなかった。要するに、あまりにもドジだったのだ。昔、救いは善行により徳を積むことで得られた。ところが、親鸞が信じた教えによれば、そんな時代はもはや過ぎ去っていた。しかし、まさにそのことにより、親鸞は教祖として大輪の花を咲かせた。

僧侶としての務めを果たせない自分と向き合う苦しみが、徹底した自己分析を果たし、最終的には今日の仏教教義として唯一無二の慚愧の教えとして成立したのだ。親鸞の述べるところは明快だ。救いは清らかな信心の上に成り立つ。しかし、本当の信心は、避けがたい [自己の] 不完全さを絶えず自覚することによって成立する。

親鸞のことばだ。「外に賢善精進の相を現ずることを得ざれ、内に虚仮を懐けばなり。貪瞋・邪偽・奸詐百端して悪性侵めがたし」多くの宗教家（ついでに言えば、怒りに満ちた独善的な道徳家や政治家）には耳の痛いことばではあるまいか。このことばはつまり、うまい逃げ道などないと言っているのだ。親鸞に言わせれば「地獄は一定すみかぞかし」だそうだ。しかも、この独白は絶望の淵で発せられたものでも、ある種の静寂主義を表するものでもない。むしろ、ありのままの人間の姿を介して道徳と宗教的探究の実情を直視した、勇氣あふれる現実主義の声なのだ。

カナダ人社会学者・哲学者のアレクシス・ショットウェルの最新刊「アゲインスト・ピューリティ（対清浄）」は、浄土真宗が説く教えと共鳴している。曰く「必要なのは、現実世界で実現不可能な清浄さを装うことではない。我々がなすべきは、過去に対する自分の立ち位置を認識し、その責任を果たし、現在に向き合い、異なる未来を生み出す努力をすることだ」個人がそれぞれに清浄さをめざしても、逆の結果しか生み出さない、そう言い放つショットウェルの声は、いにしえの僧侶のそれと重なる。ショットウェルは言う、そんなことをめざしても、唯我論、自己陶醉、自己満足に陥るのが関の山だ。

水浴であれ、瞑想であれ、ハイキングであれ、運動であれ、食事であれ、我々は一人で行う。少なくとも西洋社会ではそうだ。「私の」天然素材のヘチマスポンジ、私は「私の」思考をコントロールしている、「私の」心は澄みわたっている、「私の」300ドルのアルペンブーツ、自宅に作った「私」専用「の」ジム、胚芽パンサンドイッチにはさんだ「私の」きゅうり、完璧を追求する「私の」旅などなど。要するに、これらは「あなた[方]の」何かではありえないのだ。親鸞が言うには、清浄さやさとりに至る道すじを自分は知っている和我々が思っていること、それがそもそも問題なのだ。この問題について、親鸞ははっきりと言っている。救いに至る道など我々には知る由もない、と。「善悪のふたつ、総じてもつて存知せざるなり」さらにこう続く。「…煩惱具足の凡夫、火宅無常の世界は、よろづのこと、みなもつてそらごとたはごと…」

まさに西洋の哲学者が述べるところの「認識論的謙虚さ」だ。つまり、ソクラテスの言う、深い洞察に裏づけられた、自分は何もわかっていない、という自覚である。親鸞にとっては、それ、すなわち、自我を可能な限り低く抑えることが、もっとも基本的な求道の姿勢であった。結局のところ、人間の存在に関わるあらゆるものは、非常に意味深く、同時に無意味でもある。どう考えるかはあなた次第だ。

「善悪のふたつ、総じてもつて存知せざるなり」という「^{アゲインスト・ピューリティ}対清浄」の姿勢を貫くなかで、親鸞は、当時の仏教徒らのごく普通に表していた「悟れり」という姿勢にも異を唱えた。彼は僧侶でも俗人でもなく、どこにも属していなかった。伝統教団の徒らからは異端者扱いされ、僻地、越後に流罪となったが、親鸞はそれを甘んじて受け、自らを愚禿「愚かな禿頭」と名乗った。世間には、自分が禿頭の愚か者だと知らない禿頭の愚か者と、自分がそうだと自覚している禿頭の愚か者が存在する。そして、後者、つまり親鸞のように自らの正体を知っている愚か者たちは、自覚しているだけ、その無知さが和らげられている。仏教徒の中には、浄土教は^{グルズ}仏法を今世から遠く離れたあきらめの境地に置いてしまっている、と危惧する者もいる。しかし、あきらめることにも美德はある。それは、自分を過信することをやめ、他者の力、あるいはもろさに思いをはせる機会を与えてくれる。普通、あきらめることは美德とみなされないが、そうでもないのではあるまいか。手放すときを知ること、制御不能の瞬間を知ること、私たちががんじがらめにしている習慣や思考から自らを解放するときを知ることこそ、真の思慮深さであり、古来多くの賢者らが美德中の美德とみなしたものなのかもしれない。清浄さや完全性の追求ほど普及していなくとも、ショットウェルや親鸞同様、そうした追求がほぼもれなく自滅的な結末に終わることは予想がつく。この世での清浄さや完全性の権化とされた人たちが、実はもっとも破廉恥な偽善者だったとわかって、さほど

驚きはしないだろう。

自分自身の [諸悪との] 共謀性に向き合わない限り、自分自身はもとより、自分たちが身を置いている環境の道徳性を高めることも、崇高さを生み出す一助となることもできはしない。今こそ「不浄土」に身を置く覚悟を決めるときだ。結局のところ、それこそ我々のほとんどがすでに居住している世界なのだから。

John Kaag ジョン・カーグ：マサチューセッツ大学（ローウェル）、哲学教授。著書：*American Philosophy: A Love Story*
Clancy Martin クランシー・マーティン：ミズーリ大学（カンザスシティ）、哲学教授。著書：*How to Sell*。

原文

Opinion: In Dark Times, ‘Dirty Hands’ Can Still Do Good

John Kaag and Clancy Martin

THE STONE DEC. 4, 2017

(親鸞についての文章には下線をひきました。)

Meet Helen, a middle-aged woman newly devoted to Tibetan Buddhism, living in the American Midwest. She has recently taken a vow to limit and alleviate suffering in the world. She thinks one way to do this is to make a pilgrimage to Taktsang Monastery, or the Tiger Nest, in the mountains of Bhutan, to receive rare and precious teachings that will spiritually prepare her for her life of compassionate action. According to legend, the eighth century Buddhist master Guru Rinpoche flew to this location from Tibet on the back of a tigress, but Helen takes a 737 from Kansas City, Mo.

The fossil fuels burned on this trip damage the natural environment; the food that Helen eats on the plane is prepared by underpaid workers and supports industrial agriculture; the clothes she wears and the seats she sits on were made in sweat-shops; the airline itself is part of an enormous multinational conglomerate.

You get the point: Even what we see as our most high-minded and noble journeys can perpetuate the destructive forces that we hope to escape. In the words of the American Transcendentalist, Ralph Waldo Emerson, “My giant goes with me wherever I go.” Helen’s actions, though well-intentioned, hover between hypocrisy and self-defeat.

But perhaps we shouldn’t be so quick to judge Helen. We live in an age of deep complicity — and not just the political sort. The world’s most pressing problems are global — poverty, hunger, environmental decimation and warming — and implicate us all. To a greater or lesser extent, and often with the best intentions, we have done our part in contributing to the mess.

Seen this way, then, Helen’s complicity is not necessarily her fault. Helen did not create the circumstances in which she finds herself: it is impractical, next to impossible and probably undesirable, for Helen to find another way to Bhutan and

her Buddhist goals. If she is to be a Buddhist in any sense, however, she must find a way to work through the complicity that remains the fact of the matter.

This is not unlike what Western ethicists call the “problem of dirty hands”: the difficulty of tidying up the world’s atrocities with hands that can never be washed clean, and may get dirtier in the process. “You can’t fix the system from the outside ...” is how this kind of complicity is normally sold to someone who is being drawn into what C. S. Lewis derided as “The Inner Ring,” the place of morally inappropriate compromise.

What should we make, then, of this situation that many of us find ourselves in today, perhaps especially we Americans. What is a person to do when she is at least partly responsible for the evils she would like to escape, reduce or remedy? What if our desire to do good in the world is tainted by our own harmful actions? Is it possible to act morally or maintain spiritual traditions in a broken world?

These are not, of course, new questions. And certainly not new to Buddhist practitioners. They were of great concern in particular to the 13th-century Japanese master, Shinran, the founder of the Jodo Shinshu sect. Master Shinran believed he lived in what is known in Buddhist cosmology as the Age of Dharma Decline, a period, not unlike our own, when traditional forms of spiritual cultivation were on the brink of collapse. Shinran is famous for suggesting that the way to respond to “dirty” times — of social and spiritual dissolution and decay — is to cultivate a path to the Pure Land, a simple pristine faith in Amitabha Buddha.

While the object of faith may be pristine, however, Shinran taught that the way to the Pure Land wasn’t, and still isn’t, pure at all. On his account, we can both be complicit and hold ourselves responsible for trying to make a difference. This is a lesson particularly suited to degenerate times. Pure Land Buddhism does not want us to give up our moral lives, but to give up the pretensions that often accompany them. It believes in very modest forms of moral improvement, eked out over the life of individuals and their communities, especially when they are largely flawed.

Shin Buddhism responded very directly to the problem of inevitable and thoroughgoing complicity. Unlike the more traditional Buddhists Dogen and Honen — two closely related teachers — Shinran was never able to shake the sense that he was, from the start, unable to fulfill the duties and ideals of monastic life; he was simply too botched. In the past, salvation might have been achieved by good works or karmic progress, but, according to the Buddhist cosmology to which Shinran adhered, this time was long gone. It is precisely where he failed, however, that he succeeded as a teacher. The pain of self-understanding (that he wasn’t suited for the priesthood) passed seamlessly into self-critique, and, ultimately, into a form of confession that remains unique in Buddhist teaching today. His suggestion is clear: Salvation may turn on pure faith, but sincere faith turns on the constant acknowledgment of unavoidable imperfection.

Shinran writes: “Each of us in outward bearing makes a show of being wise, good, and dedicated. But so great are our greed, anger, perversity and conceit that we are filled with all forms of malice and cunning.” This is the sort of admission that many spiritual seekers (and, for that matter, angry, self-righteous moralists or politicians) don’t want to hear. It suggests that there is no transcendent escape, that, in Shinran’s words “hell is my permanent abode, my house.” To be

clear, this admission is not spoken from a place of despair or a certain type of quietism; it is, instead, a brave realism about the human condition that is cleareyed about the realities of moral and spiritual development.

Alexis Shotwell, a Canadian sociologist and philosopher whose recent book “Against Purity” resonates with strains of Jodo Shinshu, writes that “what’s needed, instead of a pretense to purity that is impossible in the actually existing world, is something else. We need to shape better practices of responsibility and memory for our placement in relation to the past, our implication in the present and our potential creation of different futures.” Aiming for individual purity, Shotwell says, echoing the ancient sage, is counterproductive. When we do, he argues, we become solipsistic, narcissistic and self-focused.

When one bathes, or meditates, or hikes, or works out, or eats — one typically does so, at least in the West, by oneself. It is my naturally harvested luffa sponge, my thoughts to control and my mind to clear, my \$300 Alpine boots, my home gym, my cucumber on sprouted bread sandwich, my quest for perfection. And decidedly not yours. Part of the problem, Shinran believes, is that each of us actually think we know the way to purity and enlightenment. Each of us thinks we can get there by ourselves. He is quite clear on this point: we don’t have a clue how to achieve salvation. “I know nothing at all of good and evil,” Shinran admits, “... with a foolish being full of blind passions — in this burning house — all matters without exception are empty and false.”

This is what Western philosophers term “epistemic humility” — a deep Socratic sense that one knows that he or she doesn’t know. For Shinran, this is a pivotal form of spiritual prostration — a laying low of the last vestiges of selfhood. Everything in human existence is equally meaningful or meaningless, take your pick.

“Each of us in outward bearing makes a show of being wise, good, and dedicated. But so great are our greed, anger, perversity and conceit that we are filled with all forms of malice and cunning.”

- Shinran Shonin

In being “against purity” — in knowing “nothing at all about good and evil” — Shinran also stood against the standard way that most Buddhists of his day understood themselves and enlightenment. He was neither a monk, nor a layperson, and didn’t fit in anywhere. Traditional teachers called him a fool or a heretic, and upon being exiled to the remote province of Echigo, Shinran embraced his outsider status, assuming the name Gutoku — “the stubble-faced idiot.” There are stubble-faced idiots who don’t know they are stubble-faced idiots, and there are those who do. These idiots — the ones with self-knowledge, like Shinran — might be better equipped to mitigate the effects of their idiocy.

Some Buddhists worry that Pure Land Buddhism takes the dharma too far in the direction of resignation away from the world in favor of faith. But resignation has its virtues. It means that you might have the chance to get over yourself and consider the power and vulnerability of something else. Resignation is not regarded as a virtue in our society, but perhaps it should be. Perhaps knowing when to let go, when to relinquish control, when to free ourselves from the habits of

thought that so often constrain us — maybe this is true prudence, what many ancient sages regarded as the virtue of virtues.

There is no habit of thought that is as pervasive as the aspiration to purity and perfection, but we suspect, along with Shotwell and Shinran, that it is almost always self-defeating. It comes as no surprise that the greatest champions of purity and perfection among us are revealed as the most flagrant hypocrites. Until we confront our complicity, we can never improve ourselves or the moral and spiritual circumstances we inhabit and help to create. It is high time to make our home in the “impure land.” After all, it is where most of us already live.

John Kaag is a professor of philosophy at the University of Massachusetts, Lowell, and the author of “American Philosophy: A Love Story.” Clancy Martin is a professor of philosophy at the University of Missouri, Kansas City, and the author of the novel “How To Sell.”

From The New York Times, December 4, 2017 © 2017 The New York Times. All rights reserved. Used by permission and protected by the Copyright Laws of the United States. The printing, copying, redistribution, or retransmission of this Content without express written permission is prohibited.